

文永の大彗星

一

大正三年に欧州大戦が起きたが、その前の年か、あるいは大正元年であつたかも知れないが、私は彗星をみたことがある。彗星すなわち彗星である。

私はまだその時分には出家しておらず、入寺する二年前のことであつた。今になると私を起してみせてくれた伯母さんに感謝している。こういうものはなかなかみられるものではないから起きてみなさいといわれて、暁方に起されて彗星をみたのである。その日は、演習にきた兵隊さんが私の家にとまつたので、非常に早く家の人びとが起きて、朝食を供したので彗星を発見したのである。

二、三人の兵隊さんと一緒に、桜の並木がつづいている荒川堤の上に、光芒を長く引いた彗星をみたのを今でもおぼえている。

なんでも知っている伯母さんは、もうじき戦争が始まるといったが一、二年して欧州大戦が始まったのであった。

これが私の記憶にある彗星である。

さて文永の大彗星については、大聖人さまは御遺文中に約八か所程言及されておる。今これを省略して引用してみよう。

「その後文永元年七月五日大明星之時いよいよ此の災の根源を知る」

立正安国論奥書（全集三三三ページ）

「（文永元年）七月五日彗星東方に出で余光大体一国土に及ぶ、此れ又世始まりてより已来無き所の凶瑞なり内外典の学者も其の凶瑞の根源を知らず、予いよいよ悲歎を増長す、而るに勘文（安国論のこと）を捧げて已後九か年を経て今年後の正月大蒙古の国書をみるに日蓮が勘文に相叶うことあたかも符契の如し」

安国論御勘由来（全集三五五ページ）

「正嘉年中の大地震・文永の大彗星・それより已後今に種種の天なる天変。地天此等は此先相なり」

法華取要抄（全集三三六ページ）

「去る正嘉元年の大地動・文永元年の大彗星・此等の天災は、仏滅後二千二百二十余年の間・月氏・漢土・日本の内に未だ出現せざる所の大難也」

曾谷入道殿許御書（全集一〇三〇ページ）

「但し此の本門の戒を弘まらせ給はんには必らず前代未聞の大瑞あるべし。所謂る正嘉の地動・文永の長星これなるべし」
教行証御書（全集二二八二ページ）

「去る正嘉元年八月二十三日・戌亥の刻の大地震と、文永元年七月四日の大彗星、此等は仏滅後二千二百余年の間・未だ出現せざる大瑞也。此の大菩薩の此の大法を持ちて出現し給うべき先瑞なるか」
呵責誇法滅罪抄（全集二二九ページ）

「日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり此れをそしり此れをあだむ人を結構せん人は閻浮第一の大難にあうべし、これは日本国をふりゆるがす正嘉の大地震一天を罰する文永の大彗星等なり、此等をみよ仏滅後の後仏法を行ずる者にあだをなすといえども今のごとくの大難は一度もなきなり」
撰時抄（全集二六六ページ）

「問うて云く正喜の大地しん文永の大彗星はいかなる事によつて出来せるや答えて云く云々」

撰時抄（全集二八四ページ）

以上の如く、文永の彗星については、大聖人さまは重大なる関心を示しておるのである。いながら関心というのではなく、法華經の行者の出現する瑞相となしておるのである。

正嘉元年の大地震の根源をさぐるために駿州の岩本実相寺に四か年間たてこもつて、一切経を閲読した結果が、立正安國論となったことは前述したとおりである。

「彗星東方に出でて余光大体一国に及ぶ、此れ世始まりて已来なき所…」とあるが、鎌倉時代の

人びとが、いかほど驚いたであろうかを、明治四十三年に現われた、かの有名なハレー彗星と比較して述べてみよう。

ハレー彗星は明治四十三年の五月に現われたのだが、現われる前年の方が騒ぎであったと伝えおる。ハレー彗星が地球と衝突するというので、自殺するものや大散財をする者等々が多数あつたといわれている。

民間人の星の学者、野尻抱影氏はその目撃をつぎのように述べている。

「明治四十三年五月にハレー大彗星が現われた時は、初め頭は太陽に近かつたのでみえなかつたが、尾は地平線からななめに天頂へサーチライトのように投げられていた。そして一時は、頭が夕方の西空にみえ、尾は夜明けの東空にみえるという奇観もあつた。太陽に最も接近した時は尾の長さは百二十度に達した。消えたのは六月の末だが、望遠鏡では約一年後まで観測されていた。ハレー彗星が現われた当時、私は甲府にいたが、その年の一月の午後、ハレーの先きがけとして、プラチナのように輝く長い尾をひいた大彗星が西の空に現われ、みている間に、雪の南アルプスの尾根へまっすぐ沈んで行く壯観をみた。「白昼の彗星」というのがこれであつた。」

明治四十三年五月二十日（金）発行の大阪朝日新聞は「すぎゆく彗星」という標題でつぎのようなことを載せている。

「二千万哩の尾を有し、一秒間二十八哩（一哩は十四町四十五間）の速力にて太陽面を通過する

彗星はいよいよ十九日午前十一時二十二分より通り始める訳である。願わくは晴なれかしと祈つた空は、朝来ややもすれば曇りがちであつたが、幸いに十時頃より快晴となり、十一時二十二分に至つては一天拭う如くになつた。(略)十時半頃より観測台の窓を撤した。十一時になる。十一時十分になる。どうもみえぬ。二十二分になつても見えず。二十五分になつてもみえぬ。記者も試みに、望遠鏡の下に首をつつこんでみたがやはりみえない。レンズの上の二つの黒点は太陽本来の上にあるので、たまに見えるのは急ぎはしる雲の影ばかり。ふと針のような黒点を発見してたずねたら、それはレンズのきずだという。

平山博士にただせば「見えぬのが本当だ。今回の彗星は十五吋以上の望遠鏡でなければみえまい」ということは、早く欧米の学者間に唱えられていたのだ。遺憾ながら、日本にはこの八吋以上のものがない云々」とある。

この新聞によるとこの論説の外に、この日の市中の模様をのべておるが「ハレー彗星のしつぽに包まれるの、恐ろしいガスにあてられて、生物が皆死んでしまうの、酸素が多くなつて人間がおどり出すの、石がおちてくるの、磁石がきかなくなつてくるなぞ云々といつておつたが、いよいよ太陽面通過の時は、天空一片の雲をもとめぬ日本晴れ、ハレー彗星でなくて晴彗星、しろうとの目には、すず硝子を通して、血のような色をしたまんまるい日輪さまがみえるばかりで、な

んの変つた現象をもみとめることが出来なかつた」と書いてある。

ハレー彗星が太陽面通過の時は、騒ぎがはずまって、彗星がくるぞくるぞといつておつた時の方が大騒ぎをしたとみえる。これが明治四十三年のことだから、鎌倉時代のことならなおのこと大騒ぎであつたと思う。

ハレー彗星の長さは三千二百万キロという長さであつて、地球はそのハレー彗星の尾の中を通りすぎたのであるから、一応世界中の人びとが不安に包まれたのは当然であつたらう。

日本以外のハレー彗星の太陽面通過の記事を探してみると、つぎのごとくである。

「明治四十三年五月十八日欧州やアメリカでは夜の時刻に、ハレー彗星は太陽面を通過しました。「これを観測するため」という特別な目的で、ハワイに一つの観測隊が派遣されました。そこでエラーマンは口径六吋（日本のは八吋）の望遠鏡を使用しましたが、太陽面上には（若干の黒点を発見しましたけれど）彗星はまったく何もみえませんでした」とあつてわが国の天文台の観測と一致しておるのである。

さて太陽面を通過するハレー彗星が、何故みえなかつたかといふと「この事実は、彗星の平均密度が非常に小さいことを示すもので、彗星の体積はぼう大なものですが、その中に含まれている物質の量は非常に少ないのです」といわれておる。

彗星の正体はなにかというと、現在の天文学では以下のごとく理解しておる。すなわち、彗星は現在では太陽系ができた直後に、太陽または大惑星からふきだした物質から生まれたもので、よその星の世界からきたものではないと考えられている。大きな彗星が現われたのをみると頭がぼうつとぼやけて、中心が強く光っている。この中心の部分を核という。たぶん流星のような宇宙塵と、小石大の物質と、数個の大きな岩石とがまばらに集つたものらしい。大彗星でも初めは尾がない、太陽に近づくにつれて生えはじめる。これは太陽の光と圧力によって、頭部の宇宙塵とガスがはね返されて、後方へのびるので、いわば走っている機関車の煙ににている。尾の向きは常に太陽と反対の方向になつていたので、彗星が太陽から遠ざかる時には、尾は前方へなびいている。

ここでハレー彗星について、忘れてはならないことを述べておく。それはこのハレー彗星が日蓮大聖人が御誕生になつた年の貞応元年（一二二二年）に現われておるといふ事実であるが、まだ、このことについて言及したものをみたことがないから大いに研究してみたいと思つてゐる。

コーウエルとクロンメリンの二人の英国天文家はハレー彗星の過去の運動を紀元前二四〇年までさかのぼつて、すべての近日点通過の時刻を算定して、これの二十四回の帰来の場合の一回一回について古い記録をさがし出したが、その二十回目が一二二二年の貞応元年に相当しておるのである。

さてこの記録で面白いことは、ハレー彗星出現とキリスト降誕とを結びつけようとしたが失敗したことである。

すなわち、紀元前十二年にハレー彗星は帰来してゐる。即ちキリスト降誕の数年前に起つたので「これがかのベツレヘムの星なのだ」という風に証明しようとして試みたが、しかし学者たちは、聖誕の日が、そんなに早くないという意見で、キリスト降誕とハレー彗星とは結びつかぬのである。

しかるに「日蓮は一閻浮提第一の法華經の行者なり」といわれた。大聖人の降誕の年には、このハレー彗星が帰来して、聖人の出現を予告することく、その三千二百万キロの光芒を放つたかと思うと、末法の仏出現の感がまことに強いではないか。

一一

前回にキリスト教徒は、キリストの降誕とハレー彗星の出現とを結びつけようとして、十二年という年代のひらきがあるので、残念ながらついに断念したことを申し述べた。

しかるに、日蓮大聖人の降誕の年にあたる貞応元年（一二二二年）にハレー彗星が出現してゐることは、英国のローウエルとクロンメリンの二人の天文家が証明してゐるのである。そこで貞

応元年に彗星が果たして出たであろうか。前回筆者が、「日蓮は一閻浮提第一の法華經の行者なり」といわれた。大聖人の降誕の年には、ハレー彗星が帰来して、日本国に聖人（仏を聖人と申す、開目抄中にある）の出現を告げて、その三千二百万キロの光芒を放ったと書いたが、これを証明するような文献があるであろうか。

文献はたしかにある。

先ず一番確實なる文献吾妻鏡によつてこれを検すると、貞応元年の八月二日の項目に彗星のことが出ておる。

すなわち八月二日の午後八時彗星が西北の方にみえて、その大きさは半月程あり、色は白くその光芒は赤かった。光芒の長さは一丈七尺余とある。さらに十五日の項目をみると、今夜は彗星の光芒はわずかに一尺余であると載せ、二日の日から十五日まで、毎夜出現したと書いてある。そして二十日の日には、七月の二十三日に鎌倉に大地震があり、八月になつては彗星が出現したので、これらの御祈禱を全国の神社仏閣に申しつけたと記し、その甲斐あつたが二十三日には彗星の位置は西南に変わりその長さは五尺になつた。そして二十九日には彗星の姿はみえなくなつたと書いてある。

さらに北条九代記の巻の第六、鎌倉天変地天の項目をみると左のごとく記してある。

「四月十三日に、承久四年を改めて、貞応元年とぞ号しける。この頃鎌倉の前浜、腰越の浦々

に、死せる鴨鳥いくたともなく、波にゆられてより来り、八月の初より、戊亥（西北々）の方に彗星出でて、軸星の大きき半月の如く、色白く光芒赤し、これらの怪異、只事にあらずとて、前浜にしては七座百怪の祭を行なわれ、御所においては、泰山府君の祭をぞ始められる。されど異なる珍事もなく、十一月二十二日には、京都禁裡の大嘗会を無異に遂げ行われ……」云々とある。

もちろん両書ともハレー彗星とは書いてはないが、前述の通り、二人の英国の天文家が、ハレー彗星の帰来を証明した年（一二二二年）であるから、引用文中にある彗星とは、ハレー彗星であることはいうまでもない。

聖人の御降誕はこの年の二月十六日であるから、新しい仏様がこの日本の国にすでに生まれたぞと、大空に天は告示したのであったが、当時の人は知る由もなかった。否、現代ですら、日蓮正宗以外の人びとは、聖人を日蓮宗の開祖ぐらいにしか思っていないのであるから、新しい仏様がこの日本の国に、貞応元年の二月十六日に生まれたとは解釈していいないのである。

日蓮正宗の信徒並びに僧侶の使命は、聖人が、日本に出現した新しい仏様であることを、世界中の人びとに知らせることにある。これを広宣流布の運動と称するのである。

さて、彗星が新仏出現の告示であるとは、当時の人びとは知る由もなく、天変地天の兆として祈禱のお祭りをやったのである。

北条九代記に載せる七座とは、(座とは現在の店のこと)簡略にいえば、魚、米、道具、塩、刀、着物、菓等の七つの売店である。だから、七座百怪の祭りとは、浜辺でやるくらいだから、庶民の祭りであり、泰山君府とは、君を泰山の安きにおくという言葉があるくらいだから、御所においてつとまった御貴人の祭りであろう。

彗星が出ればびっくりして大騒ぎをするのは当然であるが、鎌倉時代の人びとが彗星をどう解釈したかについて少し述べてみよう。

「彗星の出づること、自体に光りなし、日の光りをかりて見ゆ」とあるのは、現在でもその通り間違いはない。

「日の光りをかりて見ゆ、この故に、夕には東に指し朝には西に指す」といつている。これもその通りである。

彗星の光の尾に当たったところに、災難が必らず起こると解釈した。

彗星の光の尾が青いのは貴人に災難が起きるので、天子が兵に苦しめられ、あるいは大名が兵に苦しめられる兆とする。赤い光りの尾であると、賊兵が現われる。黄色であると女難によつて天子あるいは諸侯がその権力を奪われる前兆、または皇后かお姫様がその位を奪われる兆とする。黒い色の場合は水辺の賊兵が起きるといふから、河の入口や海岸に兵乱が起きるといふ。白色の時は天子諸侯が自ら兵を起すといふのである。

さて文永の大彗星についてようやく述べる段になったが、聖人は御遺文中に前回のごとく八か所も言及しておる。これは文永元年七月五日に現われた彗星のことを指す（立正安国論奥書）。

ただし御伝土代（日蓮正宗聖典五八九ページ）では「文永元年七月四日大長星前代未聞一天にはびこり満つ」とあつて一日日附が違つておるが、この時の彗星は大体二カ月位つづいたといわれるから、一日ぐらいの違いはよろしかろう。

ところが、御遺文にこのようにはつきりあるが、吾妻鏡ではこれを検することができない。というのが吾妻鏡では、文永元年の条がないのである。北条九代記には、文永元年に彗星の出たことをのせていない。

文永の彗星については、吾妻鏡も北条九代記も文永二年の出現をのせている。

吾妻鏡の文永二年十二月十四日に、今暁彗星東方に見ゆとある。さらに十八日には晴天午前六時彗星出現、長さ二尺余云々とある。さらに文永三年正月一日の夕刻に彗星が西の空にみえたと書いてある。

北条九代記によると、文永三年の十八日午前六時に、彗星が出てその長さ二尺あまり、茫気色白く、西方にみゆとあつて、この彗星は文永二年十二月以来の彗星でなかなか消えさらないので

御祈禱をしたことが書かれてある。

ところがこの時の彗星の光茫が白かったのが問題となった。すなわち前述の通り、白赤黒青等々の色によって判断したからである。

彗星の光茫の白いののは、上方において兵を起すの兆とあるのである。

文永三年といえ、聖人を伊豆の伊東に流罪した影の重要人物重時の弟の政村が執権職であり、連署は北条時頼の長子である時宗である。時宗はその時に十六歳であった。これをのぞいて鎌倉において上方といえは將軍宗尊親王（在職十五年）以外にはない。

今度の彗星の光が白いののは、宗尊親王において兵を起すの兆である。將軍が、執権連署に対して逆心ありと噂されるにいたつたのである。

正月の一日から、彗星がみえて人心恐々というのに二月の一日は、朝から日が出ているのに空が曇つて、四辺がだんだんとまつくらとなり、やがて、夜のようになつたかと思うと、午前十時頃より雨がふり出して終日やまず、ついに夕方には泥の雨がふり出し、草木の葉に泥がたまつて、枝がたおれ伏すという、前代未聞のことが起つたのである。（吾妻鏡にあり）

主殿助（昔宮中の雑役をする人）の業昌という人が勘文を旧記によつて進じた。

それによると

「抑々古は垂仁天皇即位十五年に星のふること雨の如し、聖武天皇天平十三年六月、洛中に米飯

をふらすこと一日一夜、諸人これを食するに、尋常の味に変わらず、もつとも飢をたすけたり、翌年十一月には陸奥国に紅の雪ふる、光仁天皇宝龜七年九月二十日には石瓦のふること雨のごとし、同八年早魃甚しく、井水みなたえて渴死すること多し、これ等の変異は、上古一時の災なり、然るに今泥雨のふることは、極めて先例を考うるに何の事とも知し難し、ただ深く御慎みあるべし」とあつた。

以下は筆者自身に関することで失礼であるが、不思議な雨がふつたものと、筆者の子供にこの勘文をよんできかせたが、そんな事は嘘だと一遍に否定されるかと内心思つたらそうではなくて、そんなことがあるかもわからないと子供から教わつたのには驚いた。

子供は、

「陸奥国に紅の雪ふるとあるが、最近アメリカで赤い雪がふつたと本に書いてあつた。調査したら不思議はなかつた。アメリカのある所に染物の工場があり、アノリカのことだから一村中が染物屋という大仕掛で、その染料のかすが河に流れてゆく。その河の水が蒸発して、空に染料のかすが舞い上り、それが赤い雪となつたということが……」
と云つた。

「でも、聖武天皇の御代に米飯がふつたというのは嘘だろう」と私がいうと、子供が

「それはねえ、米を一杯つんだ船がどこかにあつて、それが竜巻なんかに出あつたとしたら、米

がふるかもわからないわ」といったのには、なおさら驚いた。

なる程そんなものかと思つたが、文永三年二月一日の泥雨は、どこかの火山が噴火してその泥がまわりまわつて鎌倉にふつたのであろう。(今の世だつてビキニの灰という言葉もある)調べてみたら文永二年には阿蘇山が噴火しておるから、文永三年にもどこかの火山が噴火したのかもわからない。筆者は(昭和三十年)の七月二十八日阿蘇山の噴火中に登山して、坊中駅に下つたことがあつたが、坊中駅では泥が正に雨のごとくふつて、もののすがたがみえなくなるのを体験したことがある。

文永三年の彗星の光茫が白かつたことは、將軍が反逆するのだと噂されたが、四月になつてそれは事実であることがわかつた。

三

文永三年の大彗星が、鎌倉の宵空に真白な光を放つて輝いたことが、將軍宗尊親王に逆心ありと噂されたが、このことは事実となつて現われた。しかもこの事實は、聖人が立正安国論に予言された、自界叛逆の難の前兆であつたことが、後になつてわかつたのである。

後になつてわかつたというのは、七年後の文永九年に事実となつて現われたので、この時は未

遂に終つて、表面に事實は現われなかつた。鎌倉幕府は、立正安国論に聖人が予言したところの、他国侵逼の難、自界叛逆の難の二難は、世論を迷わすもの、人心を動揺させるの論として、これを断罪にしようとして失敗し、北海の佐渡の国に流して、のちに始めて聖人の予言が的中したので、内心に恐れをなして聖人の佐渡流罪を赦免した程であるから、文永三年の出来事が、立正安国論に予言された自界叛逆の難の前兆であるとは知る由もなかつたのである。

文永三年の自界叛逆の難の前兆を語る前に順序として、北条時宗のことを一寸話さねばならぬ。

「元軍百万を前にして北条時宗の胆甕の如し」といわれた時宗が、執権職になつたのは十八歳であつた。しかも大蒙古国より牒状の来社年に、この大蒙古国の侵入を粉碎する一大方針のきまつた時に、執権職になつたのであるから、後世史書を読むものが、北条時宗というと、胸のすく思いがするの無理がないのである。

聖人と時宗との関係は、なかなか深いものかおるが、これは順を追つてその関係を話すことになるので、今回はそれにはふれないでおく。

さて、この時宗が執権を補佐して、ほとんど執権職と等しいくらいの役である連署の役についたのが、わずかに十四歳の時である。文永三年には北条時宗は十六歳で連署という重大な役についていたのである。しかるに、時の鎌倉の將軍宗尊親王は、建長四年に京都より下向して將軍の

位につき、文永三年に至るまで在職は十五年、御歳は二十五歳という男盛りであった。

かれこれ、思い浮べる時、騒動が起りそうであり、かれこれ考える時、その不平を利用しようという輩も起りそうなものであった。

文永三年の四月頃になると、宗尊親王は御病氣と称して、諸大名との面会を断わられた。その屋敷に出入する人といえば、良基僧正と申す真言の御祈禱師のみで、たまたま屋敷の近くを通る人は、土塀の上に覆いかぶさった満開の桜に、これは思いもよらぬ、真言護身の振鈴の音をきくのみであった。

宗尊親王の病あつしと鎌倉中に知れ渡つた六月の五日の夕刻である。

なんの前ぶれもなく、急に木工頭親家というものが京都より、宗尊親王の御所に入ったが、一晩中親王とお話を申し、わずか一兩日逗留して再び京に登つたのであった。

すると親家が鎌倉に来たのは、親王の病氣見舞ではなくして、諫言に下向したのであるという噂がたちまち鎌倉の街々にひろがった。

「將軍という空名の職にあること十五年、二十五歳の男盛りが、わずか十六歳の時宗という連署に頭が上らぬとは心外と、時宗を討つて將軍が天下を領したいのが御心中……」

こんな噂が、流行させたのか、流行したのかわからないが、鎌倉の人びとは耳にしたのである。

六月十九日執職北条政村の屋敷に、北条時宗、越後守実時、秋田城介泰盛という鎌倉幕府の連署始め要職の人びとが会合し夜のふけるのも知らなかった。

六月二十日、とつじよ將軍宗尊親王の御祈禱師であつた良基僧正が、鎌倉より逐電するという事件が起つたのである。

何故の逐電か。

この逐電によつて、以上の噂が事実であることが立証されたのである。

良基僧正は將軍に謀叛をすすめた張本人であるといわれた。和歌の会などに事よせて、將軍の近習に時宗を討たせ、將軍が本當の將軍になつて、天下の政治をとるようにおすすめたのであるといわれたが、ことが破れたので逐電したといふのである。

これが事実であつたのである。良基僧正は高野山にのがれたが、あまりに噂が高かつたので、これを隠まう人とてもなく、遂に断食をして果てたのはまことに哀れであつた。

月が變つて文永三年の七月一日、この日は朝から雷が鳴つてどしゃぶりという無気味な日であつたが、それにも増して鎌倉中は大変な騒ぎであつた。しかもこれが、どうというわけかわからない。ただ、むやみやたらの大騒動が起きたのである。その前日あたりから、有無をいわせず、寺社民家にいりこんでいた諸国からの御家人侍が、七月一日の早朝から兵具を帶し旗をなびかせて、馬を乗りあらして関所をやぶり、間道を押しまわつて関の声をあげて騒ぎ続け、夜にいたつ

てもやまないのである。

さて何事であろうかということとは、騒いでいる当の御家人どもにもわからないというのである。

だが、ここに迷惑なのは、何時の御代でも同じことで、一般の民衆である。

武士が兵具をつけ、旗をなびかせて馬を鎌倉中のりまわし、夜昼の区別なければ、理由がわからなくとも、これは合戦に違いないのである。

鎌倉は谷が多いので、あわてて横穴を掘って資財をかくす者、女子供をつれて山深く逃げ込む者、舟に乗って他国に逃げる者、上を下への大騒動は近來にないことであつた。

この騒ぎが三日も続き、甲冑をつけた武士が、東西に馳せ違ふかとみる、ある時は、北条時宗の門外に集つておうい！と喊声を上げるかと思うと、政所の南の大路に馬をあつめて、やつ！と鬨の声をあげて氣勢をあげるのであつた。これは今でいえば、デモンストレーションというところ、実に巧妙な戦術である。

さて北条時宗は、入道心蓮、入道行一を使者として、宗尊親王の御所に使わした。その口上には「昔から、かかる騒動の際には、代々の將軍は、必らずまず執権職の屋敷に移られて、世の中の変を伺われたものでございます。もししからざれば、当方から、しかるべき人数を將軍の御屋敷の方に繰り出して、御所を守護したものでございますが、今回の騒動に限って、さようなこと

がございませぬのは、はばかりながら、世の中の人々が怪しむ種をまくようなものでございませぬ。急ぎ急ぎ執権職の御屋敷の方において下さい」とあつた。色を失い、ふるえあわてたのは、宗尊親王の味方であつた。

歳寒くしてのちに松柏の貞を知るといふが、日頃は媚へつらい、君のためなら命をも惜しみませんと申した輩が、皆駈け落ちして行方をくらましてしまい、宗尊親王の許に残つた人数はごくわずかであつた。

しかるに四日の正午頃である。北条教時が將軍に味方して兵をあげたという報告が鎌倉中に、ばあつとあがつたので、騒動はますます大きくなつたのである。

事実、中務権太輔北条教時朝臣は、薬師堂谷の屋敷から、甲冑の武士數十騎を従えて駈け出し、塔の辻にいたつて、鬨の声をおうとばかりあげたので、その辻の近所にひしめいていた三日以来騒諍の武士達も、氣勢をあげて、やあやあと騒ぎたてたのでことは大きくなつたのだ。だが、教時に従う数十騎を除けば、後は文字通り烏合の集なので、誰が大将であるか、どこに攻めたててゆくのか、いっこうにわからず、旗をさしあげ、馬を東西南北に馳せまわすだけで、ただ騒ぎが大きくなり、女童や老人が馬の蹄にかけられ、盗人が多くなるばかりであつた。

この由をきかれた北条時宗は、東郷八郎入道をつかわして教時に仰せ出された。

「北条家は往昔遠州時政より草創して、神に通じて天にかないて天下執権数代に伝われり。泰

時、時頼相續して正道の政治をいたす、これによつて一門すでに余風にあずかり、俸禄その身に相応して、分際に随いて榮耀に誇れり。しかるを將軍家更に國家の政道に御心をかけられず、和歌の道は本朝の風儀なれば、もつとも稽古し給うに足りぬべし。ただその暇に蹴鞠博棊をこととし、酒宴に長じ、女色に落ち入りたまひ、諸人の憂を思召し知らず、しばしば諫言すれば却つて嘲弄し給ひ、ますます恣なること天下の乱根にあらずや。あまつさへ不覺の人びとを集め、北条の家門を滅し、時宗の一族を亡ぼさんの御計い、これ何の事ぞや。それに貴殿心をよせられ、非道の結構すこぶる人外の所行と申すべし、獅子身中の虫とは、かかることの喩ならんか。年来時宗に遺恨のことも俟はば、追つて如何にも承り、しかるべき義に於ては、ともかくも分別あるべし。この度を幸とし給はば、卑怯の企て誰か心ある人一味すべき、早く御志を改めて此方へきたり給え云々」とあつた。

教時は恥しく思つたが、形勢非となりと悟つたか、東郷入道とうちつれて、時宗の屋敷にいたつて、「まったく野心はありません。だが、北条一門に敵対するものが万が一あるかも知れんと思ひまして、わざわざ敵をあざむく計略で、本日、兵を引きつれて騒ぎたてたのでございます。誓状をかくの通り申し出します」

と謝罪をしたので、この時はおさまつたのである。だが、七年後の文永九年二月には、再び叛乱

を企てて、時宗自らの手によつて斬首されたのは後にゆずる。この文永九年二月の叛逆こそ、聖人が立正安国論に予言された自界叛逆の難である。

さて宗尊親王は、その日の午後八時という夕方に相模七郎宗頼以下武士十九人、雑兵四百余人という、ものものしい護衛つきで京に登られたのであった。宗尊親王はその後入道したが三十三歳で亡くなられている。

四

天然現象は人生とは無関係であると思うのが今時である。天文学的变化は地上の出来事とは一切関係ないことである。したがつて、その天文学的变化を、地上の出来事と関係ありとして立論した立正安国論は現代には通用しない論であると、発表した論文を拝聴させられたことがある。鎌倉時代そのままの考えをそっくり支持しようとは思わぬが、さりとて、それがそっくり間違いだとは考えないのが筆者の立場であることを先にお断りしておく。

天然現象が人生と無関係であると思うのが、まず第一の間違いである。人間も天然現象の中にふくまれているのである。

もし地球が現在のように、太陽に対して二十三度傾斜ということがなかつたなら、どうなるか

というと、一日中に、海の水は二度も地球全体を包み、昼夜寒暖の差は非常にはげしくなり、とうてい人類をふくめて一切の生物の存在を許さぬというのが、天文学的常識である。地球が二十一度傾斜しておるということが先ず人生の始めであるともいえるのである。

これからまた台風の季節がくるが、もしこの台風が日本にこなかったら、どんなに「安心」かと思うのが日本人である。ところが、いづくんぞ知らん、この台風が日本に來なかつたら、日本列島は石ころだらけの島であつて、草木など一切生えない、人間の住めない島であるといふのである。

だから、台風が日本人を生んだといつてもさしつかえない。それで、日本では子供を風の子という……これは冗談だ。子供は風の子というのは、夫婦（ふうふう）の間から生まれるから風の子というのだそつで、ふうふうというのは風の音だそつな。

さてこう考へて來ると、天然現象と人生とはまったく關係ないとはいきれない。

いきれないどころか、「新パンドラの箱」毎日新聞社刊「ついに太陽をとらえた」読売新聞社刊などの原子力の構造に関する本をよむと、われわれの身体の構造が、宇宙の構造と同様なることを知つて驚くのである。

「ものを燃やしたら跡にはなにも残らないと考へるのは間違いで、そのものを作つていた原子たちは、変装の下にかくれて、休まない原子のはたらきをつづけています。説明ははぶきますが、

私たちが生きていくことができるのも、元をただしてみると、身体の中で各種各様の原子が、くつついたり離れたりして、いろいろな分子が生まれたり消えたりすることのおかげなんです。また石炭や水や空気から、プラスチックやナイロンを作ったり、塩からソーダーや肥料を作ったりする。いわゆる化学工業も、このような見方からすれば、原子という踊り子を人工的に変装させることにほかなりません」(新バンドラの箱より)これが近頃の常識である。

この極微な原千構造とわれわれの身体と、天体の構造とが、一致しているという不思議さは、妙という外はない。

天体の構造を妙法のはたらきと称する時、わが身も妙法のはたらきと称する思惟とこれは同様である。わが身は地水火風空であり、南無妙法蓮華経の当体であると、聖人はわれわれに教えているが、天然現象もこの地水火風空のはたらきにすぎない。

故に、春になれば人の心も花の咲いた春のような気持になり、秋になれば落葉の感傷的気分になるのは当然である。人生はこの変化を無視して論ずることはできない。

「春は花咲き秋は木の実なる、時のしからしむるに非ずや」と聖人は申されておるが、天地や運の推移と人生とは切り離して考えることができないのである。

過去に戦争の原因になった紛糾の原因は計算したら十六億五千数件あったといわれて、平和のむずかしさを語っておるが、その戦争にしてみても、これが天然現象の一つであるとみる学者も

いる。

俗に陽気を食うという言葉がある。私が歯痛で歯医者に行ったところが、先生がいうのには、こんな陽気になると、あなたみたいな患者が多いですよといわれた。陽気によって、歯痛が多かったり少なかったりするのである。

この話が首肯されると、つぎの説も受けいられるのである。すなわち、戦争が起こるのも地球の熱度いかにかわり、地球の温度が高いか低いかによつて戦争が起きたりやんだりするといふのである。これもうなずけないこともないのである。

薬師経の七難の中の第四番目に、星宿変怪之難というのがある。

文永の大彗星を聖人は(一)他国侵逼難の前兆(二)法華経に予言された上行菩薩出現の前兆(三)本門戒壇の流布の前兆等にもみなされたのである。

(一)の他国侵逼難の前兆であったことは、立正安国論に薬師経を引用されて星宿変怪の難を論じられたが、安国論上書後の七年目に、前代未聞という文永三年の大彗星となり、安国論上書後九年目には蒙古国より、貢物をもつて来るか、戦争するか、どちらでもよい返答しろという、蒙古の牒状となって現われたのである。

(二)法華經に予言された上行菩薩の出現ということは、聖人は弘長三年に伊豆の流罪が赦免になつておる。

聖人の建長五年四月二十八日南無妙法蓮華經の数十辺は、末法に新しい仏出現の産ぶ声であつたことは、今でも、日蓮正宗以外の人は知らないのである。いわんや、鎌倉時代の人が知らないのはもちろんのことである。だから、上行菩薩の出現ということも、聖人の内証には建長五年四月二十八日後はあつても、外的な上行菩薩としての条件がそろわなければ、第三者が認めないのである。ところが伊豆の伊東に流罪になつてからは、

「去年の五月十二日より今年正月十六日に至る迄二百四十余日の程は昼夜十二時に法華經を修行し奉ると存じ候、その故は法華經の故にかかる身となりて候えば行住坐臥に法華經を読み行ずるにてこそ候え、人間に生を受けて、是程の悦びは何事か候べき。凡夫の習い我とはげみて菩提心を發起して後生願うといえども自ら思い出し十二時の間に一時・二時こそは・はげみ候へ、是は思い出さぬにも御經を読み、読まざるにも法華經を行ずるにて候」(四恩抄全集九三六ページ)とあつて「昼夜十二時の法華經の持經者」といわれ、「教機時国抄」では(四恩抄述作の二か月後)はつきりと「法華經の行者」といわれている。法華經には、末法において法華經を説く者は、流罪の難に遭うと予言されたが、經文の通りに聖人の身がなつてきたのである。

第三者にも、聖人が法華經の行者なることがわかる条件がそろつたのである。

そこで聖人は伊豆伊東流罪中の弘長二年より、御自身をはつきりと、法華經の行者といわれたのである。内証は上行菩薩たることはもちろんである。上行菩薩か第二の釈迦かと、御書中にはつきりといわれておるところすらある。そして流罪が許された弘長三年より三年後、聖人の内証を保証するかのよう、前代未聞の大彗星出現となったのである。すなわちこれが文永の大彗星である。

すべて偉大なる出来事には必ず前兆がある。一天四海皆帰妙法といわれる程の仏さまが、この国に出現するというのに前兆のないことはないのである。文永の大彗星こそ、新しい仏出現の前兆であった。七年後の文永九年九月十二日に、聖人が仏さまであることが証明されたのだがそれは後にゆずる。

（三）本門戒壇流布の前兆

新しい仏さまが生まれれば、衆生たるわれわれに新しい魂のよりどころをお示し下さるのは、当然のことである。本門戒壇のことについては後にゆつくり述べる機会があると思う。

そこで実は表題が富士となつておるのはこの（三）の理由にあるのである。

聖人の伝記を書いて富士と題した書物はおそらくあるまい。なぜ富士と題したかという、聖人の願いとするとところは前述の（三）の本門戒壇にあるのであつて、そのための御一代と拝しておるのである。そこで筆者はせんえつながら富士と表題を掲げて、あえて大聖人御伝記と申さな

つた次第である。